

一 問一 ア 千 一 万

問二 ① 完結 ② 誤差 ③ 簡単 ④ おおうなばら ⑤ 領域

問三 登山の本質は、今日の自分の判断が明日の自分の成り行きを決定する、予定調和に終わらず、その場の状況や判断によって内容が次々と更新されていくという純粋なかたちでの自由の感覚を経験するところにある。「エベレスト」は、世界最高峰の登頂が目的とされ、筆者が考える登山の本質に反するという思いがこめられている。

問四 地図とコンパス、あるいは六分儀を使って自然に働きかけることで自己存在確認の感覚を経験するところに探検や冒険の本質がある。しかし、GPSを使うと、自然から与えられるこの感覚が弱くなり、探検や冒険の本質そのものが根本的に変質しかねないのだ。

問五 連日、寒さや風に苦しめられ、極限的な空腹にも苛まれるという肉体的な苦しさはあるにもかかわらず、GPSによって正確な位置情報を得ることで危険を減らすことができた。その結果、自分が北極の自然を直接経験している、その土地の真実の姿に触れているという感覚、さらに自己存在確認の感覚も得られぬままに、北極圏の旅を終えた。

二 問一 丨 ア 2 オ

問二 さえずり

問三 初めは手本を見ながら文字を書いていたが、少しずつ見なくても書けるようになった。そして、数え歌を最後の一行まで手本を見ずに書けた満足感に浸りながら、意味を持った言葉を文字として書き表せたことを誇らしく感じ、心の底から喜んでいる。

問四 結婚する自分の幸せを心から願う思いがこめられた、家族や親しい友人たちの愛情あふれる言葉のかけがえのなさ。

問五 愛しい人々と別れ、見知らぬ人々との新たな生活が始まる。不安もあるだろうし、苦しつらいこともあるだろう。そんな時に、自分の思いを言葉にし、文字にして表すことが、心の支えになるだろう。ヤン・インシェンは、自分の経験を通して、そのことを知っていたので、それを伝えることでシューインの幸せを願ったのだ。

解説

一 出典は、角幡唯介「エベレストには登らない」〈小学館〉。

問一 文脈をたどります。直前「～変更することが頻繁に起こるし～」、直後「～ルート変更したり、エスケープしたりすることのほうがむしろ多いくらいだ」などの表現から、変化の多い自然状況に応じて、ルートを変えたり、目的地そのものを変えたりするという内容をふまえて推理します。

問三 ☆から★までの文章では、スポーツと登山とを比較しながら「登山の本質・魅力」を論じています。スポーツが、競技の舞台が用意されていること、主催者により競技者の安全が確保されていること、を特徴としているのに対して、登山は、舞台が整っているとは言いにくく、スポーツにあるような堅苦しいルールや行動範囲を縛りつける規制は存在しないと述べています。そして、登山は、自分で舞台を拵えておこなう自己完結型の行為であり、今日の判断が明日の自分の成り行きを決定するような時間の流れのなかにある「旅」を本質にすると論を展開しています。「本質」という重要な語が登場します。旅とは予定調和に終わらず、その場の状況や判断によって内容が更新されていくのを本来の姿としていると言えます。そして、そこで達成される「純粋なかたちでの自由」の感覚こそスポーツでは決して味わえない旅=登山の本質であると結んでいます。エベレストに登ることは、登山でありながら、筆者が考える登山の本質・魅力が失われているから「エベレストには登らない」と言うのであろうと推理できます。登山と言えば最高峰のエベレストをめざすのが当たり前、というような発想に対する反発がそこに感じられます。

問四 「コペルニクス的な転回」とは、コペルニクスによる天動説から地動説への転回によって、天体以外

の価値観やものの見方までが、180度逆転、といつていいほど大きく変わることの比喩表現です。——線部を含む一文を読み返します。「それは、～人間はなぜ冒険をするのかという本質を侵しかねないコペルニクス的な転回だ」。「それ」＝「GPSを使うと、本来、旅において最も難しいはずの作業（＝位置情報の取得）が最も簡単になるという逆転現象が発生する」ことが、冒険や探検の本質を大きく変質させる、という文脈です。1頁下段末尾9行～2頁上段13行で、自然に働きかけ関わることで「自己存在確認の感覚」を経験するところに探検・冒険の、魅力・本質があると説明しています。GPSと対比されている、位置情報を取得する道具である地図とコンパスや六分儀は、それを使う人間が自然に直接働きかけます。GPSではそれがないため、「自己存在確認の感覚」が弱くなります。つまり、冒険・探検の本質に大きな変質が生じる、本質が変わる、——これを「コペルニクス的な転回」と表現したのです。

問五 2頁上段24行めに「その理由は、明らかにGPSを使っていることにあった」とあります。また、2頁上段26・27行めに「極地探検においてもっとも基本的な作業を機械（GPS）に外部委託したせいで」ともあります。「連日、寒さや風に苦しめられたし、極限的な空腹にも苛まれた」ということは、苛酷な自然にさらされていたということです。だとすると「自己存在確認の感覚」があつていいはずなのに、「自分が北極の自然とがっかりかみあっているという感覚を最後まで得ることができなかつた」「その土地の真実の姿を知る機会を奪われ」たと感じたところから生まれた「妙なもどかしさ」と考えられます。

二 出典は、まはら三桃「思いはいのり、言葉はつばさ」〈アリス館〉。

問一 1 「わあ、きれい」言いながらチャオミンは文字を見ています。喜びにあふれた表情、あるいは、強い興味や好奇心をもってものを見る表情を表す「目を輝かせ」。 2 文字は書けないと思っていた母親が手紙を書いたということに驚いています。びっくりして目を大きく開く表情を表す「目を丸くし」。「目をそらす」「目をしばたかす（しばたたく）」「目をむく」など「目」を使った慣用句の知識を確認しておきましょう。

問二 「小鳥がしきりに鳴く様子」というヒントから「さえずる」が出てくるかどうか。「あてはまるようにして」という条件から「さえずり」と活用変化させます。

問三 チャオミンは文字を書く練習を重ね、手本を見ずに書けるようになっています。数え歌の最後の一を行を一気に書きあげ、静かな、満ち足りた気持ちで自分の文字をながめています。そして、「書けた」と小さな声でつぶやき、さらにもう一度、大きな声で「書けた」と言った直後、「胸がぱんとはじけた。またとくとくと鼓動が騒ぎ始め、体の芯が熱くなる」と、はっきりと気持ちが変化します。「まぎれもなく意味を持った言葉」を「書けた」ことから生まれた自信と誇らしさに裏打ちされた心の底からわきあがってきた喜びを、「胸の内からあぶくの喜びが噴きだすようにこみあげてきた」と表現しています。

問四 「何はさておき三朝書だ。自分の愛しい人たちにつながる物がほしかった。～入っていた三朝書を胸に抱く。愛おしい重さを感じた」という文脈です。「三朝書」とは「結婚していく女人の幸せを、心から願って思いをこめて書」かれたものです（2頁上段・文章冒頭8・9行め）。「はじめて会った夫とその両親、それから弟や妹たち。見知らぬ人たちの間で～」（3頁上段末尾から15行め）とあるように、現在の結婚とは全く異なるものであることがわかります。「見知らぬ人たち」の中での生活が始まる不安を感じているシューインにとって「自分の愛しい人たち」から贈られた、結婚する自分の幸せを心から願う思いがこめられた言葉は、何ものにもかえがたいものであったろうと想像できます。

問五 問四の解説でもふれたように、作品に描かれた世界では、結婚はまったく「見知らぬ人たち」とともに生活を始める、不安に満ちたことです。チャオミンのお母さん、ヤン・インシェンもそのような不安から始まる結婚を経験しています。新たな人間関係、家族をつくりあげていくなかで、さまざまな苦労や辛い思いをのりこえてきたことでしょう。イーレイおばあさんの「ハル族の女たちは、文字を持たないの。ニュウシュの読み書きができるのは、漢族の女だけだよ」（2頁下段末尾から8行め）という言葉から、ヤン・インシェンは文字の読み書きができないハル族であることがわかりますが、どうやら文字の読み書きができるようです。ヤン・インシェンは、おそらく辛いとき、苦しいときに、様々な思いを文字で書き表し、歌を口ずさむことで耐え、心を支え、自分自身を励ましてきたのでしょう。文字に、そして言葉にそのような力があることを経験的に知っているヤン・インシェンは、そのことをこれから結婚生活を始めるシューインに伝えることで、彼女の幸せを願ったのです。